

ご挨拶

JPC(日本パーキンソン病コンgres)は、2015年6月水戸市での第1回、2017年4月東京神田での第2回、そして2019年京都で開かれたWPCにおける日本語セッションでの第3回、を開催することができました。これらの開催に際しみなさまの多大なるご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。JPCは2年毎の開催を予定していますので、4回目の開催を2021年として、AOPMC(The Asian and Oceanian Parkinson's Disease and Movement Disorders Congress、アジアオセアニアパーキンソン病・運動障害疾患学会)に合わせ準備を進めてきましたが、新型コロナウイルス感染防止のためAOPMCの開催は延期され、更に開催形式もオンライン形式となりました。

そこで、患者さんの参加が多いJPCにおいても、同じく新型コロナウイルス感染防止の観点から2021年開催を延期し、2022年7月に集合形式(オンサイト形式)で開催することにしました。

団塊世代の方々が70歳を超えるに伴ってパーキンソン病患者数は増加しており、治療法としてはiPS細胞移植による治験が行われ、遺伝子治療の研究も進み、新薬も開発されてはいますが、パーキンソン病はまだ完治が見込めない難病です。このように完治が見込めない難病に対し、どの様に向き合えばよいのでしょうか、それを患者だけではなく、パーキンソン病に関わり支えてくださっている多くの職種の方々と共に考えたいと思います。患者は、いろいろな症状を実際に体験しています。関係する多くの人たちから教えていただくだけでなく、その体験を話したり書いたりして、支援していただける方々にわかっていただけるように、表現する必要があります。黙っていて「わかって下さい」ではなく、「自ら伝える」との思いから、今回のテーマを「伝えよう！自分の症状、そして思い」としました。

医学研究の進歩、医薬品の開発、医療現場の新しい体制、治療法の追求、コメディカルの協力、患者を取り巻く周囲の協力と理解、それに患者自身の病気に取り組む意欲、これらを総合して少しでもうまく、満足のいくようにいろいろな方法を探していきたいと思います。

今回の開催は東京(浜松町)ですが、ポスターにはJR西日本金沢駅の「鼓門」をメインにしました。金沢では、古くから能が盛んで「加賀宝生」と呼ばれています。その能で使われる「鼓」は、革、ひも、胴からなり、円形の鉄枠に張られた動物の革の周囲数か所に穴をあけ、2枚を木製の胴の両端に当てて、ひもを穴と穴に渡して張り、左手でひもを締めたり緩めたりし右手指で革を打ちます。革を打つと反対側の革に響きます。この響きは今回テーマの「伝えよう！自分の症状、そして思い」と通ずるところがあります。自分から伝えることにより、周りの人にわかってもらえます。また、能は決してひとりではできないものではなく、多くの役の人が携わって全体として成り立つものです。パーキンソン病治療でも患者と医師で行うものから、多くの医療関係者が携わるチーム治療として行われるようになってきました。この様に「パーキンソン病治療」と「能」とは通ずるものがあると思い、選びました。(もう一つプライベートな理由で、私は出身が金沢近郊ということもあります。)今回開催されるJPCで、患者の声が関係する方に届き、今後の治療や薬の開発などに少しでも役に立てば幸いです。

2022年2月吉日
第4回JPC(日本パーキンソン病コンgres)
大会長 日向 浩一